そもそも，中国とは異なり，第2次世界大戦後，日本から解放された朝鮮半島はアメリカとソ連により38度線をはさんで南北に分割占領された。北朝鮮と韓国は1948年に共に相手の領域を含めた国家である，という建前をとって建国された。したがって，双方にとって相手政府は非合法組織であり，鎮圧対象であり，統一対象である。双方とも，いずれ相手が武力統一を試みる可能性を否定できない状態にあった。

南北それぞれは，朝鮮戦争が相手側の侵略で始まったと主張している。しかし，米軍の鹵獲した北朝鮮資料が公開され，さらにソ連の崩壊により，旧ソ連・東欧で当時の資料が公開されるようになってから，北の南進によって戦端が開かれたことに疑問の余地はなくなった。中国は当初北朝鮮と同じ立場をとっていたが，次第に「内戦が勃発した」というような表現を使ってどちらが侵攻したかをぼかしたり，開戦責任は重要な問題ではないという言説を表明したりするようになり，事実上，北の南進説を受け容れている［抗美援朝戦争編輯委員会］。

北朝鮮の指導者であった金日成（キム・イルソン）首相は，なぜ1950年6月に南進を試みたのか。かつて国民党が優勢のころ，ソ連は朝鮮半島の統一を重視していた。さらにソ連は，中共が内戦に勝利すると，この課題を北朝鮮指導者にゆだねるようになった。他方でアメリカも，国民党の優勢時には朝鮮の統一管理を求めたが，中共が勝利した後，統一追求を放棄した［鐸木］。次に駐韓米軍は1949年6月に軍事顧問団を除いて完全撤退した（ソ連軍撤退は1948年12月）。さらにアチソン（Dean G. Acheson）国務長官は演説の中で1950年1月に，アリューシャン列島，日本，沖縄諸島，フィリピンを結ぶ線，つまり朝鮮半島と台湾が含まれない線を「不後退防衛線」であると発表した［小此木］。1949年に中国革命が成功したのに加え，韓国の防衛力が手薄になったことが，南進統一の千載一遇のチャンスとして，金日成の目には映ったはずである。

金日成は，1950年前半に2回訪ソし，1回訪中して，中ソ両国から開戦支持を獲得するために精力的に動いた。スターリンは当初北朝鮮の朝鮮半島統一に関心がなかったと見られるが，1949年10月の中華人民共和国成立と1950年2月の中ソ同盟により，金日成の説得を受け容れるようになった［下斗米］（⇒コラム「朝鮮戦争と中朝関係」）。

戦争の勃発と国連軍の参戦・北進　1950年6月25日未明，38度線全線で戦闘が発生した。朝鮮人民軍は破竹の勢いで南下してソウルを占領し，韓国軍の主力は崩壊した。アメリカは直ちに国連に提訴し，中華人民共和国加盟問題でソ連がボイコット中の国連安全保障理事会において，北朝鮮を侵略者と認定させること

Column 9-4

朝鮮戦争と中朝関係

「鮮血で築かれた唇歯関係」は中朝関係を語るキャッチフレーズとしてしばしば使われているが，こうした親密な中朝関係の形成は，抗日戦争と朝鮮戦争によって築き上げられたものであるといってよい。しかし，冷戦終結後ソ連や中国で公開された朝鮮戦争関係の資料によって，中朝関係は決して「唇歯関係」の一言で片付けられるものではなく，一筋縄では行かなかったことが明らかとなりつつある。

1949年10月1日に中華人民共和国が誕生したが，当時，中国共産党はまだ全国を解放できていなかった。全国解放，なかでも特に台湾解放を最優先課題とする新中国指導者にとっては，平和的国際環境が何よりも大切であった。

他方，金日成はソ連に対して南北統一への援助を繰り返し要請していた。スターリンは度重なる要請に内密に応じるようになり，1950年3月30日からの金日成の秘密訪ソで，南北統一計画に関して「毛沢東が反対しなければ反対しない」との意向を示した。スターリンのお墨付きをもらった金日成は中国を訪問し，5月13日に毛沢東と会談した。2日後毛沢東は「中国統一より朝鮮問題を先行させる」というスターリンと金日成との密約に同意する旨を金日成に伝えた。中国がスターリンと金日成との密約に同意した理由には，中ソ関係への配慮や社会主義の道義に基づいた国際主義的義務が挙げられるが，海軍や空軍がきわめて弱かった解放軍がすぐに台湾攻略できず，台湾解放に一定の準備期間が必要であるという認識があったことも無視できない。

1950年6月27日，朝鮮戦争が勃発した直後に，トルーマン米大統領が朝鮮，台湾介入を宣言した。予想外のアメリカ介入，緊迫する朝鮮戦場の戦況によって中国指導者は台湾攻撃の中止も余儀なくされた。9月15日，米軍が仁川港から上陸した。朝鮮戦争への参戦を躊躇している中国に対し，スターリンは「中国の参戦で朝鮮戦場における勝利を収めれば，アメリカは最終的に台湾をも放棄するであろう」と朝鮮問題を台湾問題に結びつけて説得し，中国の参戦を促した。こうした状況の中で，中国は中国人民志願軍の派遣を決定したのである。

このように，朝鮮戦争に際し，中国，朝鮮ともに，中朝関係よりもソ連との関係をより重視し，自国の安全保障を最優先していた。朝鮮戦争を経て，朝鮮への中国の影響力が増し，「鮮血で築かれた唇歯関係」の中朝関係を築きあげたが，戦争発動までのプロセスの中で見られた両国の意思の齟齬がその後の中朝関係に影を落としたことも見逃せない。

（青山 瑠妙）

【参考文献】A. V. トルクノフ『朝鮮戦争の謎と真実――金日成，スターリン，毛沢東の機密電報による』（下斗米伸夫・金成浩訳，草思社，2001年）